

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 23 日現在

機関番号：25406

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22792282

研究課題名（和文）認知症高齢者の自己決定の機会を提供する看護介入の効果について

研究課題名（英文）A study on the efficacy of nursing intervention for supporting self-determination with dementia

研究代表者

渡辺（半田）陽子（YOKO WATANABE）

県立広島大学・保健福祉学部・助教

研究者番号：20364119

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、認知症高齢者の自己決定を支える看護介入の有効性を検討することで、以下の2点が明らかとなった。

- ① 介入モデルに基づく援助を実施することで、自己決定する力を顕在させ、円滑な人間関係を営む力を引き出す効果があることが示唆された。
- ② 選択する際の意思の示し方は、認知症程度や原因疾患、活動内容により異なっている。今後は、本研究結果を踏まえ、臨床現場で実践可能性の高い看護介入プロトコルを作成する。

研究成果の概要（英文）：

The present study aimed to investigate the effects of nursing intervention that provides opportunities for self-determination to elderly individuals with moderate or severe dementia.

- ① Qualitative inductive analysis of self-determination situation showed “making choices while interacting with care providers and other patients” from the start of intervention. “making choices in consideration of relationships with other” was seen from the 4th day and “making choices while being mindful of the surroundings” from the 12th day suggests that the present intervention brings out the ability of patients to maintain relationships with the people around them. In addition, the finding that “clearly stating intent before acting” was observed from the 8th day suggests that elderly individuals with moderate or severe dementia have a latent desire for self-determination, which may manifest due to the present intervention.
- ② The declaration-of-intention method changes with a dementia level, a cause disease, and the contents of activity. It is necessary to examine the intervention method from various viewpoints.

Based on the results of the study, we plan to develop protocols for nursing care interventions to address their collecting behavior.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|------|-----------|---------|-----------|
| 22年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 23年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：認知症高齢者，自己決定，看護介入

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者は疾患の進行に伴う判断能力や意思表示能力の低下により，自己決定することが困難になると言われている。このことについて調査者は臨床場面で，援助者の働きかけにより認知症高齢者の自己決定の力が引き出される場面に幾度も遭遇した。先行研究でも，援助者がすすめれば重度者でも「(飲み物は)これがいい。」など明確な意思を示すことが報告されている。これらのことから認知症高齢者は，援助者から自己決定の機会を提供されることで，日常生活の中の様々なことを自己決定できると考えられる。しかしながら，施設生活では「服の選択」「食事内容」などの個人の意向への配慮が十分ではないという報告が散見され，自己決定することが困難な状況となりつつある中で，自己決定をする機会が奪われているという現状があるといえる。

人が行動を自己決定することについて，心理学的意味としては「人は行動を自己決定することによって活動への動機づけが高まり意欲的になる。」¹⁾，脳の生理学的意味としては「行動を選択する過程で，得ることのできる報酬をイメージし，前頭葉が活性化される。」²⁾と言われている。以上のことから，認知症高齢者に自己決定の機会を提供する看護介入は，彼らの活動への動機づけを高めて意欲を向上させ，前頭葉を賦活させる効果があると推察される。

応募者はこれまでに，認知症高齢者 20 名(介入群・対照群 各 10 名)を対象とし，「食事」「間食」「更衣」「排泄」「レクリエーション」について連続 2 週間，「お茶と紅茶どちらがいいですか」「どちらの服を着ますか」など行動の選択肢を提示する，つまり日常的な自己決定の機会を提供するという看護介入を実施，評価するという介入研究³⁾を行った。介入の短期効果として「精神機能の変化」「少しでも意思表示できるようになる」を設定し，長期効果として「認知機能の低下の防止」を設定した。結果として，精神機能評価尺度の有意な改善がみられ，認知症高齢者は自己決定の機会を提供されることで，行動が動機づけられ，生活への意欲が向上する可能性があることが示唆された。しかし，その他の評価項目の有意な変化は見られなかった。理由として，短期間の介入であったこと，認知症高齢者を対象としており効果の詳細な評価が困難であったことなどが考えられ，今後検討すべき課題として示された。そこで，これまでに実施した研究の結果を踏まえ，研究デザインを再検討したいと考え，本研究課題を実施した。

1) E. L. Deci (1980) / 石田 梅男訳 (1985)：自己決定

の心理学—内発的動機づけの鍵概念をめぐって，誠信書房，東京。

2) Matsumoto K, Suzuki W, Tanaka K (2003) : Neuronal Correlates of Goal-Based Motor Selection in the Prefrontal Cortex, *Science*, 301, 229-232.

3) 渡辺陽子，高山成子：施設で生活する中等度・重度認知症高齢者の自己決定の機会を提供する看護介入の効果，*老年看護学*，14 (1)，5-15，2010.

2. 研究の目的

本研究の目的は，中等度・重度認知症高齢者の自己決定の機会を提供する看護介入プログラムを作成することである。

研究期間内の平成 22～23 年度に実施することは，これまでに実施した研究「施設で生活する中等度・重度認知症高齢者の自己決定の機会を提供する看護介入の効果についての研究」を踏まえ，研究デザインを再検討し，モデルに基づく看護介入を実践することと，効果を評価することである。

3. 研究の方法

◎第 1 段階：介入モデルの作成

平成 23 年度は，応募者が実施した先行研究「施設で生活する中等度・重度認知症高齢者の自己決定の機会を提供する看護介入の効果についての研究」の結果を質的に分析し，介入の有効性を検証した。

◎第 2 段階：介入モデルの検証

第 1 段階の分析の結果を踏まえ，調査を実施した。

- ・ 調査期間：平成 23 年 8 月～9 月
- ・ 調査場所：A 市内の B 介護老人保健施設の認知症専門棟
- ・ 調査協力者：VaD3 名，AD1 名，MMSE4～14 点(中等度 3 名，重度 1 名)の計 4 名
- ・ 方法：週 3 日の計 6 日間，9 時～12 時に調査者が施設に滞在し，生活行動(排泄・活動・食事(間食)・レクリエーション)場面での自己決定を促した。
- ・ 倫理的配慮：県立広島大学研究倫理委員会の承認を得て研究を実施した。

4. 研究成果

◎研究成果

第 1 段階(平成 22 年度)

応募者が実施した先行研究「施設で生活する中等度・重度認知症高齢者の自己決定の機会を提供する看護介入の効果についての研究」の結果を質的に分析し，介入の有効性を検証した。

1) 自己決定の仕方のカテゴリー

自己決定場面で，11 のサブカテゴリーと，5 のカテゴリーが抽出された。

抽出されたカテゴリーを，表 1 に示す。

2) 介入による変化

介入による変化として明らかになったことは、以下の2点である。

- ① 介入4日目以降で【援助者や他入所者との関係を考えながら選択する】、12日目以降で【周囲に対して気を配りながら選択する】がみられたことから、他者との関係性を維持する力を引き出すことができる介入である。
- ② 8日目以降で【選択の意思を明確に示して行動する】がみられたことから、自己決定の力は潜在しており、介入により顕在化される可能性があるといえる。

以上より本介入は、中等度・重度認知症高齢者の尊厳を支える援助であると同時に、自己決定する力を顕在させ、円滑な人間関係を営む力を引き出す効果があることが示唆され、介入の有効性が検証された。

有効性は検証されたが、中等度・重度認知症高齢者の自己決定を支える看護介入モデルを作成する上での課題も明らかとなった。それは、現時点では自己決定理論をもとに介入モデルを作成しているが、そのモデルでは「援助者と認知症高齢者の相互関係」という視点が十分ではない、ということである。そこで現在、人間関係論を加えた介入モデルの再検討を実施する。

表1. 自己決定の仕方のカテゴリー

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|------------------------|-------------------|
| 援助者に促されて選択の意思を示す | 援助者に促されて選択する |
| | 理由を述べて拒否する |
| 援助者や他入所者と相互に関わりながら選択する | 援助者とやり取りしながら選択する |
| | 援助者に相談しながら選択する |
| | 周囲の行動を見て一緒に行動する |
| | 選択を援助者にゆだねる |
| 援助者や他入所者との関係を考えながら選択する | 周囲の目を気にする |
| | 他者に対して遠慮をする |
| 選択の意思を明確に示して行動する | 援助者に対して自分の意思を強く示す |
| | 自ら行動する |
| 周囲に対して気を配りながら選択する | 周囲を気遣う |

第2段階（平成23年度）

平成23年度は、平成22年度の調査結果をもとに作成した「認知症高齢者の自己決定を支える看護モデル」に基づく実践を行い、評価した。

年度前半に介入モデルの検討と、調査場所への協力依頼を行った。協力同意を得られた協力者の概要を表2に示す。

表2. 研究協力者の概要

| ID | A | B | C | D |
|-------|-----|-----|-----|-----|
| 年代 | 70代 | 90代 | 90代 | 80代 |
| 性別 | 女性 | 女性 | 女性 | 女性 |
| 認知症種類 | AD | VaD | VaD | VaD |
| MMSE | 4 | 12 | 18 | 14 |

介入モデルでは、介入する生活行動は食事・間食・更衣・排泄・レクリエーションの5場面を設定していた。本研究では、4名ともに、食事、排泄、更衣という生活行動は自立しており、介入場面は、『間食』『レク』の2つの活動のみであった。調査者が実施した先行研究では、5場面中平均3.4場面で介入を実施しており、本研究では介入場面が少なかった。これは、本研究の協力者が先行研究より認知症程度が軽度であり（先行研究の協力者のMMSEは9.20±6.96点、本研究では12±5.89点）、生活行動が自立していたためであるといえる。認知症は、認知機能の低下に伴い日常生活行動の自立度が低下する。つまり、認知症が軽度ほど、行動が自立しており自分で決定できる場面が多く、認知症程度が重度で自立度が低いほど他者に選択が委ねられることが多くなるといえる。認知症程度に応じて自己決定の機会を提供する場面（活動）を検討する必要があるといえる。

2) 選択の仕方の経時変化

『間食』では、6日間の間に、4名全員が選択の意思を示すようになり、『レク』では2名が最後まで選択の意思を示さなかった。全員が選択の意思を示した『間食』について、選択場面を質的に分析した。

選択の仕方は、第1段階の研究で示された選択の仕方のカテゴリーと同様で、『牛乳は好かん』というので、『コーヒーにしますか』と尋ねると、『そうしよう』と選ぶ（A）などの【援助者や他入所者と相互に関わりながら選択する】などの選択の仕方がみられた。選択の仕方の一場面を、表3に示す。

選択の仕方の経時変化をみると、『間食』では4名中2名（VaD2名）は介入初日から「私はお茶。」など明確な意思を示して選択し、介入初日は「どっちでもいい。」など曖昧であった2名（AD1名、VaD1名）は3日目以降で「コーヒーにしよう」などと【選択の意思を明確に示して行動する】がみられるようになった。また2名は、介入3日目以降で、「隣の人に『おいしいよ、飲んでみなさい』とい

う」(C)「調査者を『こんなにたくさんおると(飲み物を配るのが)大変じゃね』とねぎらう」(D)などの【周囲に対して気を配りながら選択する】という行動がみられるようになった。このように変化するという結果は、応募者が行った平成 23 度の実施した研究と同様の結果である。

選択場面の一部を、表 4 に示す。

以上から、本介入モデルを用いた介入を実施することで、先行研究と同様に、認知症高齢者の選択の意思を引き出すことや、他者との関係性を維持する力を引き出すことができたといえる。

表 3. 間食での選択場面 (一部抜粋)

| |
|--|
| <p>【援助者に促されて選択の意思を示す】 W: お茶とコーヒー、どちらにしますか? D: コーヒー。</p> <p>【援助者や他入所者と相互に関わりながら選択する】 W: 今日、選んでもらおうと思って、飲み物、持ってきました。牛乳とコーヒーどちらがいいですか? A: わたしは、牛乳が好かんのです。 W: 好かんのですか? どうされますか? A: (コーヒー、牛乳、と指で試してみる) W: (すこし見守って) 牛乳飲むのと、コーヒー、どちらにされますか? A: わたし、牛乳がすかんのです。 W: じゃあ、コーヒーがいい? そっちにしますか? A: はい (笑顔)</p> |
|--|

表 4. 間食での選択場面の变化 (一部抜粋)

| |
|--|
| <p>C氏</p> <p>1日目 W: 牛乳とコーヒー、どちらがいいですか? C: どっちでもいいよ。 W: どっちかと言えば、どっちがいいですか? C: いつものかね。 W: いつものほうがいいです? C: いつもと違うのを飲んで、お腹壊したらいけんから、いつものでいいです。 W: 分かりました。じゃあ、持ってきますね。</p> <p>2日目 W: お茶と牛乳、どっちにしますか? C: 飲んだことないんで、いつものにします。</p> <p>3日目 W: コーヒーとお茶、どちらがいいですか? C: (笑顔で) 私、欲なけえ、コーヒーにしよう。(すぐにコーヒーを選ぶ) (隣の人に) おいしいよ、飲んでみんさい。 W: おいしいですか? よかったです。</p> |
|--|

3) 活動による選択の仕方の違い

4名の、『間食』と『レク』場面を比較し、活動による選択の仕方の違いを検討した。表 4は、意思表示の有無を示している。

4名とも間食については選択の意思を示

した。レクは、2名(B, C)は初日から、提示したレク物品を用いて熱心に活動したが、他の2名(A, D)は6日とも促しには興味を示さず、うち1名(A氏)は他の協力者とのレク場面は楽しそうに見ていた。

調査者が行った先行研究でも、『間食』は全員が選択の意思を示すことができたが、『レク』では拒否の意思を示したり、選択の意思が不明瞭であったことから、本研究においても同様の結果であったといえる。

表 4. 意思表示の有無

| | A | B | C | D |
|----|---|---|---|---|
| 間食 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| レク | △ | ○ | ○ | △ |

※「○」: 選択の意思を示す

「△」: 不明瞭

これは、『間食 (飲み物の選択)』は、『レク』のように活動が複雑ではなく、「好き」「嫌い」という嗜好で選ぶため、選択しやすい活動であるためと考えられる。先行研究でも、重度認知症患者が食事に関して意思表示するという報告がいくつかあるが、本研究でもMMSE得点が4点の重度者が間食については意思を示せていた。このことから『間食』は、疾患が進行しても最後まで自己決定が行える活動であるといえる。

一方『レク』は、選択時には道具の使用や状況判断、過去の経験に照らす価値評価など、記憶や認知などが必要となる。特に、記憶障害を中心とした認知機能障害が進行するADの場合は、「どちらがいいですか?」と言葉で選択を促したり、使用する物品を提示するという方法では、活動内容の理解が困難であるといえる。また活動への意欲が低下している、という理由も考えられ、何らかの活動を自ら選んで実施したい、という意欲を引き出すには、もっと長期間の働きかけが必要なのかもしれない。他にもレクの場合、選択肢の中に興味を持てる活動内容がない、ということも考えられ、他の活動と比較すると選択の意思を引き出すことの難しい活動であると考えられる。ただA氏は、選択を促しても興味を示さなくても、他者が行っている活動を楽しそうに見ていたことから、他の活動のように「選択肢を提示する」という方法よりは、実際に行なっている場面を示すなどの方法が有効なのかもしれない。

以上より、活動や、認知症の種類によっても、効果的な選択の促し方が異なっていると考えられ、今後検討する必要があるといえる。

◎まとめ

以上の結果より、本モデルをもとに援助を
実践することで、認知症高齢者は自分の意思
で生活行動を決定できるといえるが、認知症
の程度や種類の違い、間食・レクなど活動内
容の違いによって意思の示し方が異なってお
り、様々な視点から介入方法を検討する必要
性が示された。つまり介入モデルの提示だけ
では臨床での実用性は低いと考えられ、この
ことを今後の検討課題とする。

◎今度の課題

今後は今までの研究成果を踏まえ、自己決
定を支える看護についての方法論をより具
体的に提示できるように、「自己決定を支え
る看護介入プロトコル」を作成していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計1件)

渡辺陽子：高齢者施設で生活する中等度・重
度認知症高齢者に自己決定の機会を提供す
る看護介入の有効性についての検討，人間と
科学 県立広島大学保健福祉学部誌，査読有，
11 (2)，29-40，2010

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺(半田)陽子(YOKO WATANABE)

県立広島大学・保健福祉学部・助教

研究者番号：20364119

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：